

ダイアログ

「父さん、神さまっているの？」

父親は読んでいた本を横に置き、何も言わずに子供をじっと見続けていた。

「父さん、僕は神さまがいるかどうかを聞いたんだけど。」

「わかってるさ。今、考えてるんだ。」

「考える必要なんかあるの？ 僕は神さまがいるかないか知りたいだけなんだ。」と、少年はイライラしながら言った。

「いいかい。神様を信じる人もいれば、信じない人もいるんだよ。」と、慎重な父親は言った。

「僕にとっては、神さまなんていないんだ。」

「いないの？」

「いないよ。試してみたい？」と、少年は空を見上げて、「僕は新しい自転車が欲しいんだ、神さま。今すぐに。」

少年は少し、それもほんの少し待ってから、勝ち誇ったように、皮肉っぽくこう言った。

「ね？ 神さまがどうしていないってわかった？」

「よし。」と、戸惑いながら、父親は言った。「それは、証明にはならないな。人は欲しいものをすぐには手に入れることができないんだよ。」

「ああ、でも、もし神さまがいたなら、僕に自転車をくれたはずなのに。でも、神様はいないんだ。」

父親は一言も語らなかった。

「神さまはいない。」少年は言い張った。「わかったでしょ？ いないんだよ。そうでなければ、死んだんだ。神さまは死んでしまったんだよ、父さん。」

まあ、これはこれだと、父親は思った。息子はニーチェが発見するのに数年もかかったあの事を言っている。ところが、少年の上機嫌はたちまち消え失せた。つまり、息子が泣き悲しんでいたのだった。疲れているのだと父親は思った。彼を胸に抱きかかえ、安楽椅子と一緒に座り、息子が眠りにつくまで揺すって寝かしつけた。そして、彼をベッドに横たわらせた。しかし、父親はその時点では、すでに本を読む気持ちなぞなかった。そうして、父親はパジャマを身につけ、同じように床についた。

父親は朝早く目を覚ました。息子は大いに満足した表情を顔に浮かべて、夫婦のベッドのそばにいた。

「父さん、僕が夢で何を見たかわかる？ 僕を殺したがっている敵の野郎たちが僕を取り囲んでいる夢を見たんだよ。そうしたら、機関銃が天から降って来て、そこで僕は一人残らず敵を殺したんだ。全員なんだよ、父さん！ 機関銃でね！」あの機関銃をよこしてくれたのは神さまなんだ！

父親はほっとしてため息をついた。とどのつまり、神さまは機関銃がもたらされる様に

頼んだのさ。

2005年12月2日
田所清克・岐部雅之共訳